その場に立ち会うこと、あるいは、述語を共有すること
――国木田独歩「今の武蔵野」の現在

永井 聖剛

キーワード：表現主体、定言、引用、場所、交感

1. はじめに

国木田独歩「武蔵野」（『武蔵野』所収、民友社、1901年）は、最初「今の武蔵野」という題で『国民之友』（1898年1月−2月）に発表された。この原題に示されているように、語り手「自分」の関心は「今」の「武蔵野」に向けられている。冒頭の一文はこうである。

> 「武蔵野の俤は今纔に入間郡に残れり」と自分は文政年間に出来た地図で見た事がある[1]。（一）

一文を挟んで、「自分」はさらにこう畳みかける。「自分は武蔵野の跡の纔に残て居る処とは定めて此古戦場[2]あたりではあるまいかと思て、一度行て見る積で居て未だ行かないが実際は今も矢張其通りであらうかと危ぶんで居る」。「それほどの武蔵野が今は果していかゞ[ママ]てあるか、自分は詳はしく此問に答へて自分を満足させたいとの望を起したことは実に一年前の事であつて、今は益々此望が大きくなつて来た」。「それ丈け自分は今の武蔵野に趣味を感じて居る」。

しかし、これほどまでに「今」に対する執着を示しておきながら、「自分」はこのあと、過去の日記や他者の文章の引用をふんだんに駆使しながら「今の武蔵野」を語るという、一見したところ自家撞着とも受け取れる語り方を採用している。

身も蓋もない指摘をするならば、「自分」は甲武鉄道と川越鉄道とを乗り継いで「今の武蔵野」を確認しに行きさえすればよかったのである（甲武鉄道は1889年に飯田町－八王子間が開通。川越鉄道は1895年に国分寺－川越間が開通[3]）。飯田町（現飯田橋）から国分寺で乗り換えて現地までの所要時間は2時間ほどであるから、さほどの距離ではない。日帰り圏内である。にもかかわらず、「自分」はそうしなかった。どうしてだろうか。

この問題を、ロマン主義的方法として片づけることも可能だ。つまり、隔たっているからこそ感興が、郷愁が湧く、というわけだ。すでに独歩の身近なところでは、宮崎湖処子が『帰省』（民友社、1890年）においてこのやり方で成功を収めている。ただし一方では、のちに『自然と人生』（民友社、1900年）に収められる掌編のなかで、徳冨蘆花が観察行為の「わたし・いま・ここ」に即したスケッチ[4]

1
「今の武蔵野」の本文引用は初出に拠るが、誤植と思しきものは刊本を参照して修正した。なお、本文中の傍点・下線はいずれも引用者が施したものである（以下の引用においても同じ）。

2
小手指（現・埼玉県入間郡）、久米川（同所沢市）の古戦場を指す。

3
国分寺−久米川（現在の東村山）間は、1894年に開業している。

4
「此頃の富士の曙」（『国民新聞』、1898年1月25日）が、まさに「今の武蔵野」の同時代テクストである。

を展開して、これもまた清新な表現領域を開拓しつつあった。「今の武蔵野」をこのやり方で表現することも可能だったのである。ちなみに、蘆花に自然のスケッチを薦めたのは、独歩その人であったと言われている[5]。

ここでひとつ仮説を立てる。独歩は、湖処子とも蘆花とも異なるアプローチの仕方で「今の武蔵野」を描くことを試みたのだ、というものだ。その際に小稿が着目するのは、たとえば「これが今の武蔵野の秋の初である」(二)のように、「これ」(=引用された文に表象された「武蔵野」)と「今の武蔵野」とをイコールで結ぶナラティブのあり方である。要するにこれは、等価でないものを等価であるかのように言いなすナラティブであるが、これこそが「今の武蔵野」というテクストを成り立たしめる重要な要素であると、今の私[6]は考えている。以下、順を追って問題点を整理しながら論じていきたい。

5
沖野岩三郎「解題(3)」、徳冨蘆花『蘆花全集』第三巻、蘆花全集刊行会、1929年

6
この「等価でないものを等価であるかのように言いなすナラティブ」のことを、かつて私は非合理として否定的に論じたことがある(『自然主義のレトリック』双文社出版、2008年、180–185頁)。小稿では、そのときとは異なる見解を述べていくことになる。

2. 表現位置と表現主体

「今の武蔵野」の主題は、武蔵野の「美」もしくは「詩趣」である。そう「一」の末尾で語った「自分」は、「二」の冒頭で、「そこで自分は材料不足の処から自分の日記を種にして見たい」と述べ、さっそく2年前(正確には15ヶ月前)の日記を引用する。

> 九月七日——『昨日も今日も南風強く吹き雲を送りつ雲を払ひつ、雨降りみ降らずみ、日光雲間をもるゝとき林影一時に煌(きら)めく、——』これが今の武蔵野の秋の初である。(中略)二日置て九日の日記にも『風強く秋声野にみつ、浮雲変幻たり』とある。恰度此頃はこんな天気が続て大空と野との景色が間断なく変化して日の光は夏らしく雲の色風の音は秋らしく極めて趣味深く自分は感じた。(二)

これを発端として、このあと、9月19日から翌年3月21日までの日記文が抄録されて、そのまま「二」は幕引きとなっている。

ここからわかるのは、「今の武蔵野」の「今」が、必ずしも「今=この瞬間」を指示しているわけではないということである。『日本国語大辞典』では「今」をまず「過去と未来との境になる時。現在」と定義したうえで、さらにこれを三分類している。㋑ただいま。現在の瞬間。㋺現在の時点に少し幅をもたせた時間。㋩現代。今の時代。現今。今日(こんにち)。このなかでは㋩がそれに該当する。テクスト冒頭に引用された「文政年間に出来た地図」や、そこに書き込まれた『太平記』の逸話など、「昔の武蔵野」との比較のうちに浮かび上がってくるもの、さしずめそれが「今の武蔵野」なのであろう。事実、「自分」も「昔の武蔵野は萱原のはてなき光景を以て絶類の美を鳴らして居たやうに言ひ伝へてあるが、今の武蔵野は林である。林は実に今の武蔵野の特色といつても宜い」(三)と言っている。

とはいうものの、一方で「今の武蔵野」は、明らかに㋑ただいま＝現在の瞬間を志向してもいる。

> 秋九月中旬といふころ、一日自分がさる樺の林の中に座してゐたことが有ツた。今朝から小雨が降りそゝぎ、その晴れ間にはをり／＼生ま暖かな日かげも射してまことに気まぐれな空合ひ。あわ／＼しい白ら雲が空ら一面に棚引くかと思ふと、フトまたあちこち瞬く間雲切れがして、無理に押し分けたやうな雲間から澄みて怜悧し気に見える人の眼の如くに朗かに晴れた蒼空がのぞかれた。自分は座して、四顧して、そして耳を傾けてゐた。木の葉が頭上で幽かに戦いだが、その音を聞たばかりでも季節は知られた。（三）

言うまでもなくこれは、「ツルゲーネフの書たものを二葉亭が訳して『あいびき』と題した短編の冒頭にある一節」（三）である。すでに論じ尽くされた観のある部分であるが、立論上必要な問題についてのみ、要点を押さえておこう。

この二葉亭訳「あひゞき」（『国民之友』、1888年7–8月）に「近代の表現変革」を読み取ったのは、杉山康彦[7]である。杉山は、「小雨、晴れ間、日かげ、雲、雲間、蒼空という微妙な変化が、そういう瞬間々々が何気なくとらえられている」ことを高く評価し、それを可能にしたのが「自己の位置、ここというものがはっきりしているということ」であると評した。「すべての外界はその位置から表現されており、そのことによっていまというものの表現が可能になっている」。独歩は「あひゞき」から「表現位置「いま」「ここ」」を学び、それが「今の武蔵野」を見いださせた、というのである。

杉山が強調しているように、文章表現における「わたし・いま・ここ」の発見は、主体と客体とを切り離すことでもあり、そこから、表現主体としての「自己」の確立という別次元の主題がせり出してくるわけであるが、近年になって兵藤裕己[8]が別の観点から同じ主題に切り結んでいるので、そちらも参照しておこう。

兵藤が着目するのも、明治期の翻訳文体である。なかでも、西洋語を日本語に翻訳する際に「文」の基本形が「S is P」と定式化されたことが決定的だったという。「西洋語に習熟した知識層のあいだに浸透した「文法」の観念、西[9]の訳語でいえば、命題形式の文（センテンス）を構成する「主位〔subject〕」と「屬位〔predicate〕」、それを統合する「定言〔copula〕」すなわち陳述の観念が、近代の言文一致体が形成される何よりも重要な基盤となってゆく」。

こうした見解を示したのち、兵藤はくだんの「秋九月中旬といふころ、一日自分がさる樺の林の中に座してゐたことが有ツた」について触れ、こう言う。「この文の傍点を付した主語「自分が」は、通常の日本語文としては不要であり、不自然でもある。こうした翻訳文体が生まれた背景には、西洋語の主語人称代名詞の形式性が、明治の知識層のあいだで、必要以上に実体的に受けとめられたという背景があったろう。（中略）文法上の主語「自分」を明示し、「S is P」の

7
杉山康彦『ことばの藝術』大修館書店、1976年、182–183頁

8
兵藤裕己「言文一致体の起源——「主体」の観念、「近代的自我」の始まり」、『季刊iichiko』152、2021年

9
西周（にしあまね）を指す。西は『致知啓蒙』（1879年）において「イハ、ロナリ」を「命題」の基本形式とし、「イ」を「主位」、「ロ」を「屬位」、「ナリ」を「定言」と名づけた。これらはそれぞれ、今日の「主語」「述語」「陳述」に相当する。

命題形式、主語・述語の呼応関係がまぎれないことに意をもちいた翻訳調の文章が、世界を認識・表象する固定項として「自分」を位置づける。そのような文体が、世界と、自分と外界に二項的に切り分ける」。

このようにして兵藤は「S is P」の命題形式が、「S」すなわち「主体〔subject〕」の観念を成り立たしめた[10]と論じるわけであるが、これもまた、たいへん興味深い見解である。ただし、その「あひゞき」を引用しながら物語られる「今の武蔵野」について言えば、疑問がないわけではない。どうして「今の武蔵野」の「自分」は、自分の目で見たものをそれとして記さず、あえて「あひゞき」を長々と引用し、ロシアの風景表象でもって代用するのだろうか。せっかく手に入れた「世界を認識・表象する固定項」としての「自分」を行使せず、他者の観察行為を借用するのか。もっと言えば、はたしてこれは「主体」なのだろうか。

10
この「主体」の始まりは、一方では田山花袋や島崎藤村の自然主義文学、主人公の「自分」を主語・主体として編成される白樺派の文学などにつながり、また一方では、ナショナルな空間を構成する国民主体につながる、と兵藤は説く。なお、同時代の「あひゞき」受容については、安藤宏「『あひゞき』の系譜」、『季刊iichiko』153、2022年も参照。

3. 主体の消しかた

小稿も、兵藤が着目した「S is P」の命題形式に拠りつつ考察を進めていこう。その上で、もういちど「これが今の武蔵野の秋の初である」（二）を見てみよう。さきに述べておいたように、「これ」が指示する引用文をもって「今の武蔵野」の代用とする、特徴的なナラティブである。

この一文は、いかにも「S is P」の形式を用いているように見えるが、ここに「主体」としての「自分」、「客体」に対峙する「自分」はあらわれない。その代わりに、「自分」は「定言」の主体として潜在的に関与している（~~自分は~~これが今の武蔵野の秋の初である~~と考える~~）。すなわち、「S」と「P」とを無条件に結びつける（「SはPである」と定言する）役割を「自分」は担っていたのである。

このことを確認した上で、「三」の「あひゞき」引用にかかる一節を考察していこう。「あひゞき」冒頭部を長々と引用したあと、「自分」はこう語っている。

> 則ちこれはツルゲーネフの書たものを二葉亭が訳して『あいびき』と題した短編の冒頭にある一節であつて、自分がかゝる落葉林の趣きを解するに至つたのは此微妙な叙景の筆の力が多い。これは露西亜の景で而も林は樺の木で、武蔵野の林は檜の木、植物帯からいふと甚だ異て居るが落葉林の趣は同じ事である。（三）

「甚だ異て居る」にもかかわらず「同じ事」であるという非合理（「露西亜の林」は「武蔵野の林」である）を、無理筋と分かっていながらも「定言」すること。「自分」が右の語りで敢行しているのは、このことにほかならない。さらにまた、そう「定言」することによって「自分」は、「あひゞき」の語り手「自分」が「露西亜の景」を描いたのと同じやり方で「武蔵野の林」を描くことが、さも合理的であるかのようにふるまうことができるようにもなる。こういう手続きを経てなされたのが、次の言述である。

檜の類だから黄葉する。黄葉するから落葉する。時雨が私語く。凩が叫ぶ。一陣の風小高い丘を襲へば、幾千万の木の葉高く大空に舞ふて、小鳥の群かの如く遠く飛び去る。木の葉落ち尽せば、数十里の方域に跨る林が一時に裸体(はだか)になつて、蒼(あを)ずんだ冬の空が高く此上に垂れ、武蔵野一面が一種の沈静に入る。空気が一段澄みわたる。遠い物音が鮮かに聞へる。自分は十月二十六日の記に、林の奥に座して四顧し、傾聴し、睇視し、黙想すと書た。『あいびき』にも、自分は座して、四顧して、そして耳を傾けたとある。此耳を傾けて聞くといふことがどんなに秋の末から冬へかけての、今の武蔵野の心に適(かな)つてゐるだらう。秋ならば林のうちより起る音、冬ならば林の彼方(かなた)遠く響く音。(三)

一目にして、下線を施した部分に「あひゞき」から学んだ「微妙な叙景の筆」が用いられていることが明らかであるが、あらためて確認しておきたいのは、これらの特徴的な語りに「自分」が姿を見せていないことであり、また、それでいて文法(主−述の呼応)的にも何ら破綻が見られないことである。あえてこう言おう。独歩「今の武蔵野」は「あひゞき」から〈主体の消しかた〉を学んだのではあるまいか。

この問題を、三つのレベルで整理してみる。

一つ目は、「今の武蔵野」の「自分」が、「あひゞき」の「自分」のふるまいをほぼまるごと模倣しているという点である。ふつう「模倣」は「主体」的な営為とは認められない。また「模倣」とは「自分」自身を離れて「他者」に同一化する指向性を備えている。この意味でも「自分」は、一般的な意味での「主体」を手放していると言えるだろう。

第二に、「今の武蔵野」における「叙景」の多くが、他者や過去の「叙景」で代用できてしまっているという点である。このとき「自分」は、「いま・ここ」において「世界を認識・表象する」「主体」ではけっしてない。こう言ってよければ、彼の本質は「引用者」なのであり、「今の武蔵野」は文字どおりの意味での引用の織物なのである。

第三に、先の引用の下線部、たとえば「時雨が私語く」や「空気が一段澄みわたる」などに顕著にあらわれているように、独歩が「あひゞき」から学んだのが、「自分」という主語を用いることのない「叙景の筆」であるように思われるという点である。「自分が」という主語ではなく、「時雨が」「空気が」という主語で成り立つ文体を採用することで、「自分」は「主体〔subject〕」を消しているのである。おのずからして「今の武蔵野」は「述語」的な空間として現出することになるだろう。

では以下、節をあらためて、いま述べた第二と第三の問題についてさらに検討していくことにする。

4. 引用の織物としての武蔵野

ここまで見てきたように、「引用」は「今の武蔵野」において実に特徴的かつ重要な機能を担っている。「自分」は、自分の目で見たものを、自分が見たこととして表現することができたはずである。引用などせずとも、「自分」には「今の武蔵野」を表象することが可能だということだ。またそうすることで、彼は「表現主体」としての「自己」をより直裁的に表出することも可能だった。にもかかわらず、「自分」は、あえて明示的な「引用」を選択し、「自己」を前景から退けた。それはどうしてか。そうすることによって得られた表現の地平はどんなものだったのか。次に問われるべきなのは、「自分」がこれほどまで「引用」に拘ることの意味である。

さきほど「三」の事例を検討した。そこでは、自己の過去の日記が引用され、ツルゲーネフ「あひゞき」が引用され、「これが今の武蔵野である」との言明が加えられていた。これと同じパターンの語りは、「四」にも確認することができる。

> 十月二十六日の記に、野を歩み林を訪ふと書き、又十一月四日の記には、夕暮に独り風吹く野に立てばと書てある。そこで自分は今一度ツルゲーネフを引く。
> 『自分はたちどまつた、花束を拾ひ上げた、そして林を去ツてのらへ出た。日は青々とした空に低く漂ツて、射す影も蒼さめて冷かになり、照るとはなく只ジミな水色のぼかしを見るやうに四方に充ちわたつた。(中略)鳩が幾羽ともなく群をなして勢込んで穀倉の方から飛んで来たが、フト柱を建てたやうに舞ひ昇ツて、さてパツと一斉に野面に散ツた――アヽ秋だ! 誰だか禿山の向ふを通ると見えて、から車の音が虚空に響きわたツた……』これは露西亜の野であるが、我武蔵野の野の秋から冬へかけての光景も、凡そこんなものである。(四)

他者のことばを引用し、自家薬籠中のものとした上で、他者が見たように(他者のことばを介して)対象を見ること。これらの言表には、認識に先立ってことばがある、客観的実在に先立ってことばがある、といった方法的確信のようなものがあらわれていないだろうか。観察主体としての「自分」が客体としての「武蔵野」を描く、という素朴実在論的な主客のモデルを前提に理解していたのでは汲みきれない表現史の一断面がここにはある。

それにしても、右の引用部においても「これは露西亜の野であるが、武蔵野の野も、凡そこんなものである」といった主旨の「定言」がなされていることが気に懸かる。

この一文で「自分」は、二つのことを述べている。一つ目は「これは露西亜の野である」ということ。これは、文脈上、疑う余地もなく真である。しかし、二つ目の「これは武蔵野の野でもある」という定言は、またしても、互いに異なるものを恣意的にイコールでとり結ぼうとするもので、無前提に真であるとは

言いがたい。では、どうして両者は〈同じ〉と言えるのだろうか。

たとえば「三」において「自分」は、こう述べていた。「これは露西亜の景で而も林は樺の木で、武蔵野の林は楢の木、植物帯からいふと甚だ異て居るが落葉林の趣は同じ事である」。こういうことだろう。①露西亜の野には落葉林の趣がある、②武蔵野の野にも落葉林の趣がある、③よって露西亜の野は武蔵野の野と〈同じ〉である――いわゆる述語的な統合によって両者がイコールで結ばれ(類化され)ていたのである。これと同様に、さきの「四」の引用につづく部分でもこういう断りがなされていた。「武蔵野には決して禿山はない。しかし大洋のうねりの様に高低起伏して居る」。つまり「高低起伏して居る」という述語的な同一性によって、主語的な差異は意味をなさなくなり、両者を〈同じ〉ものとして見ることが可能になる、という次第である。

いま私は、主語的な同一性よりも述語的な同一性の方が意味を持つ、といった主旨のことを書いた。別のところで借用した例をここでも用いるならば、「人は死ぬ。しかるに草は死ぬ。ゆえに人は草である」[11]という推論がそれによく似ている。人と草とを、「死ぬもの」というカテゴリーで括ることで(提喩(シネクドキ)的に)類化するわけである。人と草とは、主語的に見れば別物だが、述語的には〈同じ=同類〉となる。

これと同じことが「引用」についても言えないだろうか。「今の武蔵野」を書き綴ろうとする文章に、「あひゞき」が引用可能なのは、両者に述語的な同一性が(少なくとも「自分」の水準において)認められるからであろう。

さきほどの「四」の引用のうち、「中略」した部分には落葉林の様子がこう語られていた。「黄ろくからびた刈株(かりかぶ)をわたツて烈しく吹付ける野分に催されて、そりかへツた細かな落ち葉があはたゞしく起き上り、林に沿ふた往来を横ぎつて、自分の側を駈け通ツた、のらに向ツて壁のやうにたつ林の一面は総てざわ〳〵ざわつき、細末の玉の屑を散らしたやうに煌きはしないがちらついてゐた。また枯れ艸、莠、藁の嫌ひなくそこら一面にからみついた蜘蛛の巣は風に吹き靡かされて波たツてゐた」(四)。

これらの「述語」の連なりは、もともと「露西亜の野」という「主位〔subject〕」に相対する「屬位〔predicate〕」として定位されていたものであるが、「自分」は「これ」を、そのまま「今の武蔵野」の「屬位」に転位してしまう。ついさきほどまで「露西亜の野」のものだったものが、「今の武蔵野」を構成するものに転移する。それは、「典拠」や「影響」といった類いの(通時的な)二者関係とはまったく異なる、より積極的な間テクスト的実践――「通時態を共時態(文学構造)に変換する調整」(ジュリア・クリステヴァ[12])――がなされていたものと理解したい。引用されたテクストは引用されてそこにあるだけではない。別の場所に移動し、その場所の性質によって変位し、場所それ自体の意味を再組織化させる。つまり、述語が主語を変容させる。その、変容する瞬間こそが「今の武蔵野」の「今」なのである。

クリステヴァは間テクスト性について、こう述べていた。「この移行が行われ

11
前田愛『文学テクスト入門』筑摩書房、1988年、78頁

12
ジュリア・クリステヴァ『セメイオチケ1』原田邦夫訳、せりか書房、1983年、60–61頁

るときに力点移動と圧縮がそこに結びつくからといって、それだけが操作の全体だということにはならない。その上に定立をもたらす措定の変形がつけ加えられる。古い措定が破壊され、もう一つの措定が形成されるのだ。新しい意味体系が同じ意味素材をもって作られることがある。(中略)相互テクスト性［間テクスト性］という用語は、ある(ないしいくつかの)記号体系からもう一つの記号体系への転移を表す。しかしこの用語が往々にして、あるテクストの「典拠の研究」というありきたりの意味に受け取られてきたことを考えると、われわれはそれに替えて転移＝措定移行(transposition)という用語を選ぶ」[13]。

13
ジュリア・クリステヴァ『詩的言語の革命』原田邦夫訳、勁草書房、1991年、55–56頁

あらたな「定立」をもたらす「措定の変形」——これはまさに「これは露西亜の野であるが、我武蔵野の野の秋から冬へかけての光景も、凡そこんなものである」(四)などの言表が果たしていた役割を名指していないだろうか。それは、クリステヴァに倣って「転移＝措定移行(transposition)」と呼ぶことができる。「転移」されたのは「露西亜の野」ばかりではない。「武蔵野の野」もまた同時に「転移」され、「新しい意味体系」のもとにリプレイスされている。

かくのごとく、「今の武蔵野」の「自分」は、観察＝言表主体である以上に、引用＝言表主体としての機能を存分に発揮している。このことは、表象された「武蔵野」が実在論的な(すなわちありのままの)武蔵野とは異質なものであることを意味してもいるだろう。『武蔵野』は一般に、写実すなわち素朴実在論的なテクストとして文学史に位置づけられているが、それとは別の歴史的文脈を付け加える必要がある。

5. 引用の疫学

ついさきほど、「引用＝言表主体」という言いかたをしたが、そもそも「引用」は能動的な営為なのだろうか。次に考えてみたいのは、この点である。

たとえば、「食べる」は、一見、まぎれもない能動のように見える(「私がイチゴを食べる」)。しかし、ときに私たちは、艶々としたイチゴが眼前にあるという環境が「食べたい」という食欲を喚起することを経験的に知っている。この場合の「食べたい→食べる」行為は能動とは言い切れない。かといって受動でないことも確かだ。食欲が生じて「食べる」までの過程は環境依存的(エコロジカル)で、中動態的である。こうしてそのイチゴは、私に取り込まれ、私の組成の一部をなす。同じことは「読む」についても、「引用する」についても言えるのではないか。その文章が、私に「引用したい」という欲を喚起して、引用させる。他者の文章なのに、自分の文章にも通用するように思われるからだ。引用された一文は、私の文章に取り込まれ、その一部をなす。

受動と能動とのあいだの動的で隠微なせめぎ合いのようなものが、そこには確かにある。引用するという一連の営為の過程のどこかで、主体(する)と客体(される)との関係が、別の関係を結ぶ。「引用する」は能動だが、他者を取り込むことで自己

は他者化するわけだから、これは受動である。さらにやがて能動の状態が回復しているように思われるが、もはやその実態は他者化した自己と言うべきであろう。

よく知られているように、ガブリエル・タルドはあらゆる文化的営為を「伝染」という概念で説明しようとした（『模倣の法則』[14]1890年）。この、文化の伝染という問題を「表象の疫学」として発展的に論じたのが、ダン・スペルベル『表象は感染する　文化への自然主義的アプローチ』（菅野盾樹訳、新曜社、2001年）である。この疫学的なアプローチは、「今の武蔵野」を考察するにあたっても実に示唆的である。「引用＝感染」という理解の足掛かりを得られるからである。

たしかに引用は感染によく似ている。「感染する」が、表向きは能動（太郎がウイルスに感染した[15]）であるように見えて、受動（ウイルスが人体に感染した）でもあるように、引用もまた、能動であり同時に受動でもあるような営為である。また感染は、自他の境界の越境であり、自他合一の現場でもある（covid-19という「人獣共通感染症」によって、人は獣と述語的に統合される）。

以上の議論を踏まえて、「今の武蔵野」における「感染」の現場をあらためて検証してみよう。検討材料は、「自分は十月二十六日の記に、林の奥に座して四顧し、傾聴し、睇視し、黙想すと書た。『あいびき』にも、自分は座して、四顧して、そして耳を傾けたとある」（三）というくだりと、それに続く以下のような「感染」後の言表とである。

> 鳥の羽音、囀る声。風のそよぐ、鳴る、うそぶく、哮ぶ声。叢（くさむら）の蔭、林の奥にすだく虫の音。空車荷車（からぐるまにぐるま）の林を廻（めぐ）り、坂を下り、野路を横ぎる響。蹄で落葉を蹴散（けち）らす音、これは騎兵演習の斥候か、さなくば夫婦連れで遠足に出かけた外国人である。何事をか声高（こわだか）に話しながらゆく村の者のだみ声、それも何時しか、遠かりゆく。独り淋しさうに道をいそぐ女の足音。遠く響く砲声。隣の林でだしぬけに起る銃音（つゝおと）。（三）

これらの「叙景」に（文法論的な）主体〔subject〕としての「自分」が存在しないことを、あらためて確認しておこう。あえて補うならば、「鳥の羽音、囀る声（が（私に）聞こえる）。風のそよぐ、鳴る、うそぶく、叫ぶ声（が（私に）聞こえる）。」となるから、文中に明示的に書き連ねられていたのは、いずれも知覚の対象＝客体〔object〕ということになる。述語と言い換えても差し支えない。

ここで浅利誠の議論を参照する。浅利は、佐久間鼎『日本語の言語研究』（恒星社厚生閣、1959年）を参照しながら日本語のコプラ（Copula）[16]について再検討する論考[17]の中で、「山が見える。」「風が鳴る。」の二文を取り上げ、まずこれらを英文と並べて比較している。英文にはあらわれる「I（私）」が、日本語にはあらわれないことに注目してほしい。

> 山が　見える。　I see a（the）mountain.
> 風が　鳴る。　I hear the wind roaring.

14
ガブリエル・タルド『模倣の法則』池田祥英ほか訳、河出書房新社、2007年

15
英文では「Taro got infected.」だから、主体はウイルスの側にある。

16
命題の主辞と賓辞とを結合させる動詞のこと。連辞。繋辞。

17
浅利誠「コプラと「である」「ある」は動詞なのか、形容詞なのか、あるいはどちらでもないのか」、『季刊 iichiko』152、2021年。この中で浅利は、動詞「ある、いる、見える」による存在表現を、「私は日本人です」などのコプラ文形式の表現とは異なるものとして区別し、さらに「ある、いる、見える」を「現前・不現前動詞」と呼び、その本質を「形容詞的」であることだとした。

さらに前者は、仏語ではこうなる。「On voit la montagne.（人は、山を見る）」、「Je vois la montagne.（私は、山を見る）」。これらからわかることは、英文・仏文の表現では「（文法論的）主体がある」ということであり、日本語の表現では「（文法論的）主体がない」ということである。興味深いことに、浅利は「「山が見えます」という日本語文は、「この場所に立ったら、どんな人間にも、このように、山が見えます」というようなニュアンスの文である」と述べている。「I」や「Je」などの主体が消去されている以上、それと連動して、見える景色もまたある種の没個性性＝普遍性を帯びるというのである。以上のような意味で、英文・仏文は「人間本位」であり、日本語は「自然本位」である。なるほど、「山が見える」「風が鳴る」とは、いかにも自然本位の表現である。

金谷武洋の議論[18]も併せて見ておこう。金谷は、「見える」「聞こえる」などといった知覚以外の行為についても日欧比較をしている。以下に例示するように、英文においてさまざまな行為の動作主として表現されている「I（私）」は、日本語においては表にあらわれることはない。「私」という動作主が「消える」のである。

18
金谷武洋『日本語と西欧語　主語の由来を探る』講談社学術文庫、2019年

お金がある。	I have money.（所有）
この家が欲しい。	I want this house.（欲求）
中国語が分かる。	I understand Chinese.（理解）
時間が要る。	I need time.（必要）
この街が好きだ。	I like this city.（好き）

英文がいずれも、他動詞を使った積極的行為文（SVO構文）であるのに対して、日本語では格助詞「が」が重要な役割を果たしている。しかもそれは行為者を示さない。「大抵の場合、「私」はそもそも登場しない。表現されたとしても、せいぜい「私は／私には」と、主語ではなく主題（トピック）で現れるにすぎない。トピック（topic）の語源はギリシャ語の「topos」で、人ではなく「場所」である。つまり、あの人がある出来事に関わっている、ある人を通じてこれこれのコトが出来する、ということに過ぎない」[19]。

19
前掲、28–30頁

金谷は、こうした日本語の特性を「虫の視点」と呼び、「神の視点」――行為者としての「I（私）」をまるで第三者のように見下ろすもう一人の話者がいる――の英語と区別する。「英語の「I see Mt.Fuji.」の視線は行為者である「私（I）」から富士山へ向かう。ところが「富士山が見える」では逆である。富士の姿が「虫の視点」を襲うのだ。かくて文は、富士山の「見える」という性質を表現する状態文となる」[20]。

20
前掲、67–69頁

論点を再整理しておこう。そもそも、杉山や兵藤らの先行研究において「自分は座して、四顧して、そして耳を傾けた」のくだりは、近代的な知覚＝表現主体としての「自己」が確立した、その決定的な現場にほかならなかった。しかし、いま確認してきたことは、むしろ逆の現象である。そこでは「主体」が日本語の表現の特性を活かすかたちで巧妙に消去され、嘱目の光景が宿る「場所（トポス）」と化し

ていた[21]。文章として綴られていたのは、時間の経過とともに進行する述語の連なり、知覚経験の連なり[22]のみであり、その知覚においても、表現主体のオリジナリティは脱色され、むしろ主客における共感覚的な知覚のなりゆきが展開されていた。もちろん、嘱目の対象を選び、言語化しているのは「自己」である。ただし、表象された述語の連なりは「自己」固有のものでありながら、だれとでも共有可能なものとして供出されていたのである。

21
「私が（武蔵野を）見る」の「私が」が主格であるのに対して、「（私には）武蔵野の野が見える」の「私に」は与格と呼ばれる。格助詞「に」は、「時間的・空間的・心理的なある点を指定するのが原義」（『広辞苑』）であるから、「私に」という与格は、所与の条件が揃った「場所」を意味していよう。

22
金谷武洋（同前）は、「虫の視点」を用いる日本語の表現は「探索的」かつ「発見的」であり、「コトの出来した順に、時間軸に沿って進んでいく方を好む」と述べている（61頁）。

6. その場に立ち会うこと

武蔵野の風景が（私という「場所」に）宿る。宿るとは、引用でもあり、引用とは絶えざる「転移＝措定移行（transposition）」の現場でもあった。そこでは、自分が自分でなくなって別の自分になり、武蔵野が武蔵野でなくなって別の武蔵野になるようなことが次々と、至るところで生起している。

次の引用は、玉川上水に架かる橋の上にたたずむ「自分」が、流れを眼下におさめつつ語る場面である。

> 橋の下では何とも言ひやうのない優（やさ）しい水音がする。これは水が両岸に激して発するのでもなく、又た浅瀬のやうな音でもない。たつぷりと水量があつて、それで粘土質の殆ど壁を塗つた様な深い溝を流れるので、水と水とがもつれてからまつて、揉み合て、自から音を発するのである。何たる人なつかしい音だらう！
>
> “———— Let us match
> This water’s pleasant tune
> With some old Border song, or catch,
> That suits a summer’s noon.”
>
> の句も思ひ出されて、七十二才の翁と少年とが、そこら桜の木蔭にでも踞つて居ないだらうかと見廻はしたくなる。自分は此流の両側に散点する農家の者を幸福（しやはせ）の人々と思つた。無論、此堤の上を麦藁帽子とステツキ一本で散歩する自分達をも。（六）

「今の武蔵野」においては、もつれつからまりつつ流れる水音が人懐かしさを喚起し、自（おの）ずからその気分をワーズワス詩（「泉 *The Fountain*」）が代理＝表象する。引用された詩編は、そこがあたかも英国湖水地方の水辺であるかのようにも思わせる。もしや（小金井堤の）桜の木陰に、かの老人と少年とが座っていないだろうか——。いま・ここを超え出た「自分」が、述語的な連鎖を介して、他なる存在と交感する「場所」、それが「今の武蔵野」である。

さていま、さしあたり「交感」ということばを用いて説明したが、この鍵となる概念について、もうすこし考察を深めてみたい。参照するのは、『荘子』秋水篇の「知魚楽」をめぐる中島隆博の議論[23]である。

23
中島隆博『荘子の哲学』「第四章『荘子』と他者論——魚の楽しみの構造」、講談社学術文庫、2022年

「今の武蔵野」で「自分」と「或友」とが玉川上水を橋上から眺めていたように、『荘子』でも荘子と恵子とが濠水のほとりで遊んでいる。荘子が言う。「儵魚〔はや〕が出でて遊び従容としているが、これは魚の楽しみである」[24]。恵子が言う。「きみは魚ではないのに、どうして魚の楽しみがわかるのか」。恵子が拠って立つのは、自己の経験は他者から隔絶した私秘的な固有性を有していて、他者からはうかがい知れないはずだという論理である。これに続く対話はこうである。

> 恵子が言う。「きみは魚ではないのに、どうして魚の楽しみがわかるのか」。
>
> 荘子が言う。「きみはわたしではないのに、どうしてわたしが魚の楽しみがわからないとわかるのか」。
>
> 恵子が言う。「わたしはきみではないから、もとよりきみのことはわからない。きみももとより魚ではないのだから、きみが魚の楽しみがわからないというのも、その通りである」。

恵子がこだわっているのは「わたし／きみ／魚」という主語ごとの経験の固有性である。議論の前提として「わたし／きみ／魚」という隔絶性があるということだ。しかし「わたし」の経験は、こうした経験の私秘的な固有性にすべて収斂してしまうものではない。荘子はこう答えた。「もとに戻ってみよう。きみが「おまえは魚の楽しみがわからない」と言うのは、すでにわたしがわかっていることをわかっているから、問うたのである。わたしはそれを濠水の橋の上でわかったのだ」。

荘子は「楽しい」という述語の共有可能性の方に賭けているように思われる。中島の議論に耳を傾けよう。「荘子は、自己の経験の構造それ自体を問題にする。経験が経験として成立するためには、それは自分ではないものに開かれていなければならない。（中略）しかも、この場面では、荘子と恵子の間に対話らしきものが成立しており、恵子もまた荘子の経験が他者に開かれたものであることを形式的には了解しているはずである」[25]。

さらに中島は、「わたしはそれを濠水の橋の上でわかったのだ」のくだりに特に注目して、こう述べる。「ここで問われているのは、荘子という「主観」もしくは「自己」が前提される以前の事態である。「自己」があらかじめ存在し、それが魚との間に特定の身体配置を構成し、その上で「魚の楽しみ」を明証的に知ったということではない。そうではなく、「魚の楽しみ」というまったく特異な経験が、「わたし」が魚と濠水において出会う状況で成立したのである。この経験は、「わたし」の経験でありながら、同時に「わたし」をはみ出す経験である（なぜなら「わたし」にとってはまったく受動的な経験であるからである）」[26]。

小稿なりに言い直せば、こうなる。「主位〔subject〕」としての「わたし」が「屬位〔predicate〕」としての「魚（の楽しみ）」を理解したのではない。「魚の楽しみ」が（「濠水の橋の上」から水中の魚を眺めるという身体配置のなかで）「わたし」に宿ったのである[27]。それは同時に、この「楽しみ」を介して、「わたし」と「魚」とが、主客の関係とは別の近しい関係に入ったことを意味している。

24
『荘子』の引用は、中島隆博『荘子の哲学』（同前）による。

25
前掲、186頁

26
前掲、190–191頁

27
中島隆博（同前）は「受動的な経験」（191頁）と呼んでいるが、これを「中動的」と言い換えても差し支えないだろう。

それは「自己」の経験の固有性を確認するのではなく、ある特定の状況において、「他者の楽しみ」としての「魚の楽しみ」に出会ってしまい、出会うことで「わたし」が特異な「わたし」として成立したということである。ここにあるのは根源的な受動性の経験である。「わたし」自体が、「他者の楽しみ」に受動的に触発されて成立したのである[28]。

28
前掲、191–192頁

先の「今の武蔵野」(六)の引用文に戻ってみよう。「自分」とワーズワス詩とは、引用する／される関係にあるようでいて、実はそうではない。橋上から「水と水とがもつれてからまつて、揉み合て、自から音を発する」「何とも言ひやうのない優しい水音」を聞くという身体配置(「その場に立ち会う」[29]こと)が、「自分」とワーズワス詩(Let us match / This water's pleasant tune)との「近しい関係」をつくったのである。「交感」とは、この「近しい関係」の言い換えに他ならない。

29
前掲、192頁

同じことが、ツルゲーネフ・二葉亭訳「あひゞき」についても言える。一般に「あひゞき」と「今の武蔵野」とは、前者から後者への影響関係として理解されている。表面的に見ればそれは模倣行為でもある。しかし、この理解は一部修正が必要だろう。むろん、「林の奥に座して四顧し、傾聴し、睇視し、黙想す」る姿勢が「あひゞき」由来であろうことは疑いない。ただしこれは、「林の奥に座して四顧」するという身体配置、すなわちこの環境とこの体験とが、「自分」と「あひゞき」翻訳文とのあいだの新たな交感関係を生んでいると捉えるべきなのだ[30]。「あひゞき」をあらかじめ内面化した個人(主体)が、「あひゞき」のように武蔵野の野(客体)を見た、のではない。「林の奥に座して四顧」するという身体配置をもった体験をしたとき、「あひゞき」が、すなわち「他者の楽しみ」が「自分」という座において成立したのである。「今の武蔵野」の文体には、その受肉のなりゆきが逐語的に刻印されている。

30
安藤宏「『あひゞき』の系譜」は、独歩『武蔵野』が「あひゞき」を手本として引用しながらも、風景を客体として叙述するのではなく、「むしろ語り手と読み手との共同主観的な場が中心になっている」と指摘している。

――以上、小稿では、「今の武蔵野」において、「露西亜の野」と「武蔵野の野」とが無媒介にイコールで結ばれていることへの違和感に端を発し、その「定言」を可能にするロジックを複数の角度から考察してきた。「今の武蔵野」は、多くの過去の声や他者の声の引用からなっているが、それは必ずしも、現在／過去、引用する主体／される客体、自己／他者、能動／受動といった対関係に回収される関係ではなかった。そうではなく、引用の場そのものが、中動的な経験の現場として、「自分」を主／客や自／他の縛りから解放する役割を果たしていたのであった。

その際に、カギとなっていたのは、「述語を共有できる」という実感である。述語を共有できたとき、自と他の境界はなくなって(「人は死ぬ。草は死ぬ。人は草である」)連続した「近しい関係」になり、また、その述語の運動に巻き込まれるようにして、世界そのものが変容していく。変容＝転移する世界に出会っていく。だからそれは常に、経験のレベルにおける「今」を生きることになるのである。

「今の武蔵野」の「自分」は、一見したところ無邪気に、いささかの葛藤も抵抗

もなくツルゲーネフになりきり、ワーズワスになりきっていたようにも思われるが、それは「自分」が他者や異文化について無知だったからではない。全く逆である。主語の側からではなく、述語の側から、彼の振る舞いを見なくてはならない。「なりきる」とは場所になることであり、場所になるとは、述語に促されつつ新たな世界のなかでの接続可能性に開かれることでもある——。このことの意味が「わからなかった」のは、むしろ（主語に囚われた）私たちの方だったのである。

7. おわりに

ここまでの議論を、日本近代文学におけるリアリズム史の文脈に接続させてみたらどうなるだろうか。紙幅に限りがあり数例を挙げるのみにとどめるが、たとえば、自然主義の代表的なテクストである田山花袋『田舎教師』（佐久良書房、1909年）の三人称の小説文体が、視点人物である主人公の経験を「述語」的に構築し、それを他者のことばとして最大限に活用（引用）することで成り立っていたことが、いまならばよく見えてくるだろう。

> 四里の道は長かつた。其（その）間に青縞の市の立つ羽生の町があつた。田圃にはげんげが咲き、豪家の垣からは八重桜が散りこぼれた。赤い蹴出を出した田舎の姐さんがおり〳〵通つた。
>
> 羽生からは車に乗つた。母親が徹夜して縫つて呉れた木綿の三紋の羽織に新調のメリンスの兵児帯、車夫は色の褪せた毛布（けつとう）を袴の上にかけて、梶棒を上げた。何となく胸が躍つた。（一）

この、一見して何気ないリアリズム文体においても、〈主体を消すこと〉と〈述語を共有すること〉とが積極的な意味を担っていたことがわかる。観察する「主体」と観察される「客体」との組合せを暗黙の前提としていた実在論的な理解の枠組みからは読み解けない、闊達自在な虚構（フィクション）言語の機能と、それによって切り開かれた虚構世界の拡がりとが、われわれの視野に入ってくる。

「描写」については、花袋自身が、「波の音がした。」よりも「波の音が聞えた。」のほうが「描写の気分に近い」と述べていた[31]ことがしばしば取り上げられ、知覚表現（「聞えた」）が文体上のカギを握っていると理解されてきた[32]。それはそのとおりなのだが、そもそも「波の音がした。」にしても「波の音が聞えた。」にしても、知覚の主体〔subject〕が消され、「場所」として扱われていたことが、まずは、より根源的な問題だったのではないか。

急いで補っておかなくてはならないのは、如上の問題が、二葉亭から独歩、独歩から花袋へなどという単線的な影響関係に還元され得ない、間テクスト的に交錯する交通の一断面であるということだ。『田舎教師』から、もう一例見ておこう。

31
田山花袋「描写論」、『早稲田文学』、1911年4月

32
安藤宏「第7章 人称」、安藤宏・高田祐彦・渡部泰明編『読解講義 日本文学の表現機構』岩波書店、2014年、172頁

時には一葉舟の詩人を学んで、『雲』の研究をして見やうなどと思ひ立つこともあつた。信濃の高原に見るやうな複雑した雲の変化を見ることは出来なかつたが、ひろい関東平野を縁取つた山々から起る雲の色彩にはすぐれたものが多かつた。裏に出ると、浅間の烟が正面に見えて、その左に妙義が鳥渡(ちよつと)頭を出して居て、それから荒船の連山、北甘楽の連山、秩父の連山が波濤のやうに連なり渡つた。両神山の古城址のやうな形をした肩の処に夕日は落(おち)て、いつもそこからいろ〳〵な雲が湧きあがつた。(十九)

『田舎教師』の主人公は、「一葉舟の詩人」、すなわち島崎藤村の「雲」(『落梅集』所収、春陽堂、1901年)などに綴られた知覚を述語的になぞることで、北関東にひろがる眺望に相即した自己の身体配置を見いだしていたのである(『田舎教師』には、これと同様に、独歩『武蔵野』を読み耽りつつ風景を眺める主人公の姿も語られている[33])。藤村「雲」が、ラスキン『近世画家論』(1843–60年)の感化のもとに、ラスキンのように信州の風景を眺めることで得られたテクストであることは、周知のことだろう。

33
藤森清は「再現的だとされるリアリズム・テクストが、実際には影響についての自己言及に満ちたテクストとしても読めること」の事例として『田舎教師』を詳細に分析している(『語りの近代』有精堂、1996年、37–55頁)。

主体=主語〔subject〕を前提としない文学史もしくは表現史を語ることは可能だろうか。私は可能だろうと構えているが、ただしそれは容易に想像できるように、情緒的な「国民」の一体感の形成や、「未熟な個人」による近代化といった、既視感のある議論と紙一重の間柄にある。実際、『田舎教師』の主人公は、このあと、日露戦争の国民的興奮の渦の中に呑み込まれていくわけであるが、ここではひとまず、そういった末路に直結させて評価するのではなく、ツルゲーネフが、ワーズワスが、ラスキンが受容されると同時に転用されていた現場に秘められた可能性の方に着目したい。小稿で検討してきたように、その受容=転用の現場では、「私」という存在が「主語=主格」ではなく、「述語」の宿る「場所=与格」として据えられていたのだった。

subjectの意味に「主」と「従」との双方があることは、よく知られていることだろう。金谷武洋[34]によれば、実は「subjectの原意は「主」ではなく、その正反対の「従」だ」った。「「従」であったはずのsub-jectは、時代を下るにつれて次第にその地位を向上させ、ついには「主」と見なされるに至った」。そして同時に、「それとは反対方向に、自然(nature)が次第に息を止められてい」く、「人間と自然の力関係がちょうど交差したパラダイム・シフト」が進行したのだという。西洋近代における認識の転換(人間中心主義および自然の客体化)が、こうした文脈に与っていることは言うまでもない。

34
金谷武洋『日本語と西欧語　主語の由来を探る』、15–17頁

このパラダイム・シフトの傍らに「今の武蔵野」を置いてみるならば、このテクストが述語的に編成されていたことの歴史的意味がクリアに浮かび上がってくるのではないだろうか。西洋文学からの影響を明示的・自己言及的に語るテクストが、日本語の、新しい言文一致体小説として自己形成していくときに、何を吸収し組成の一部となし、何を分離したのか。しつこいようだが、「主語=主体」がないからといって、それを未熟な近代化と評するのは、あまりに一面的に

過ぎる。〈主語＝主体を消すこと〉は、リアリズムの文体生成の歴史の中で、理にかなった「転移＝措定移行」であったと言うべきであるし、同時に、密やかかつ大胆な反抗であったと言うことすらも可能なのである。